

日光田母沢御用邸見学会

実施日：2024年11月22日(金)～自由参加(懇親会+宿泊)

集合場所：東武日光駅前広場 9時45分

アクセス：東武線 急行 浅草駅(6:50)～東武日光(9:18) 1,393円 (PASMO片道)
東武線 リバティきぬ105号 浅草駅(7:30)～東武日光(9:23) 3,043円 (PASMO片道)
東武線 スペーシアX1号 浅草駅(7:50)～東武日光(9:39) 3,333円 (PASMO片道)
東武バス 中禅寺温泉行(9:55発) 東武日光駅～日光田母沢御用邸記念公園 6分
350円 (片道2.8km)

午前の部：日光田母沢御用邸見学

10時～11時30分

入館料 500円

研修室にて入野役員が建物紹介

その後、各自自由見学

昼食：弁当を用意、研修室にて昼食

弁当代 1500円～2000円(飲料含む)

※午前の部だけの参加の方は、ここで解散



午後の部：東武バス(湯元温泉行)

(12:21、12:51、13:19発)

バス代 1,200円 (50分)

(タクシー移動の場合

約7,600円/1台 30分)

日光田母沢御用邸記念公園

～船の駅中禅寺

～徒歩(30分 2.0km)

イタリア大使館別荘見学

入館料 300円

1時間程度各自自由見学

※午後の部 15時頃解散



温泉の部(自由参加)：

奥湯元温泉 亀の井ホテルで懇親会、宿泊(11,750円/ひとり) 懇親会費は別途

イタリア大使館別荘～亀の井ホテル(タクシー移動 約6,100円/1台 25分)

翌日は自由解散

備考

※この見学会への自家用車での参加は、すべて自己責任でお願いいたします。

※この見学会に掛かるすべての費用は、参加者の負担となりますので、ご理解ください。

※宿泊は、11月12日以降キャンセルした場合にはキャンセル料が発生する場合があります。

※見学会参加後、アンケートにご回答いただいた方にBSIJ CPD1.5単位を付与いたします。

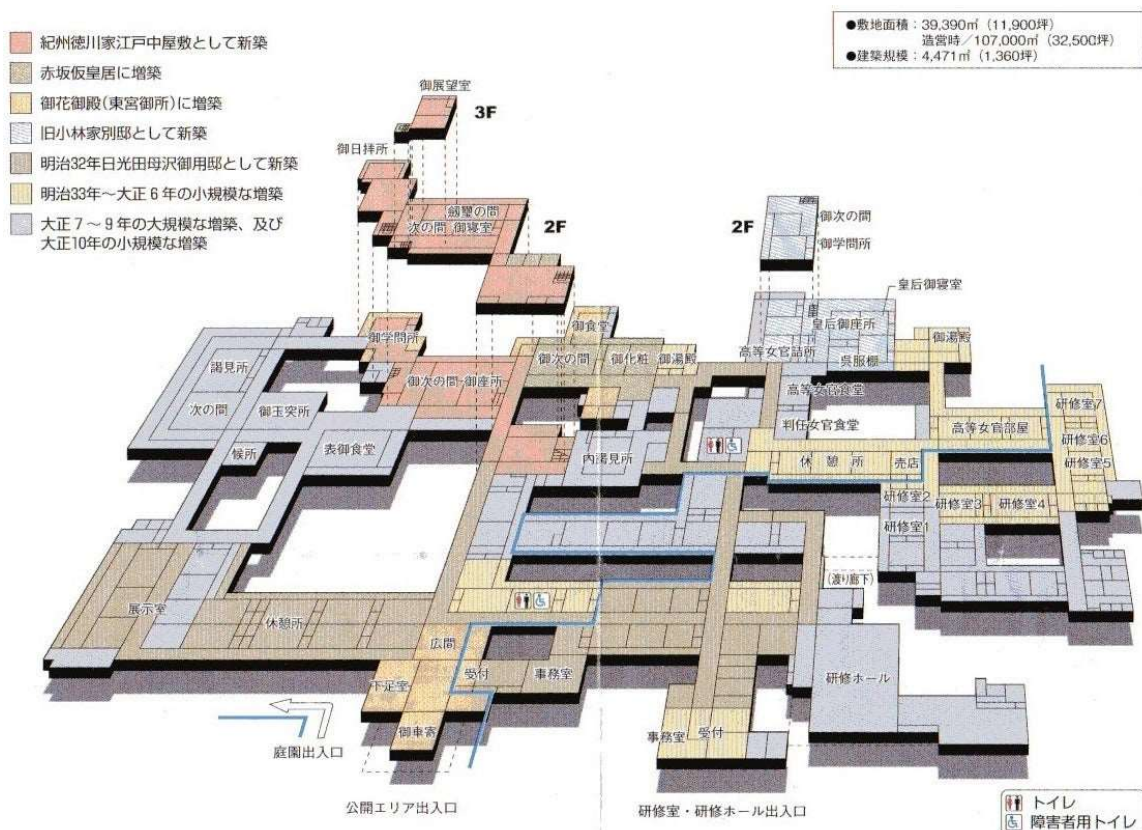
このCPD1.5単位は、日光田母沢御用邸見学のものに付与されます。

日光田母沢御用邸の魅力

明治期に各地に造営された数ある御用邸の中でも最大規模の木造建築で、・付属邸を含めた御用邸の中で本邸が現存する唯一の建物です。

--御用邸の位置付けと建物の概要--

- ・皇太子（後の大正天皇）のために造営され、・明治 31 年 4 月民有地を買収し、翌年 1 月起工、7 月に殆どが完成しました。
- ・新営の宮殿は赤坂離宮所在元紀伊徳川氏邸宅の一部を移築し、買上民家に改造を施し、これに増築が行われています。
- ・一部は二階及び三階建その他は総て平屋建となっています。御車寄、受付の間、各事務室、皇族休所、謁見所、御玉突所、御食堂、聖上御座所、内謁見所、皇后宮御座所、調理所及び女官部屋その他より成り、その中公用室及び事務室は立式にして私室は座式又は立式を併用しています。（明治工業史第五章第一節第一概説より）
- ・大正時代になると、それまで皇太子の別邸であった日光田母沢御用邸は、天皇の別邸として位置付けられて、より重要な施設となりました。
- ・夏季の長期滞在は皇太子時代に既に恒例化し、天皇即位後も変わることなく続けられたため大正時代には大規模な増改築や模様替えが相次いで行われています。
- ・その後、昭和 22 年御用邸としての役目を終え廃止、払い下げとなりました。
- ・江戸時代の移築建物、明治時代の在来建物と新築建物及び大正時代の増築建物が用途別に配置され、廊下でつながり江戸・明治・大正の三時代の和風建築様式が分離されながら一つの建物群として構成された



極めて貴重な建築物です。

午後の部：【イタリア大使館別荘】

設計者：アントニン・レーモンドについて

帝国ホテルの設計に際しフランク・ロイド・ライトと共に来日したのをきっかけに、日本に魅了され、400件を超える設計を手掛けたレーモンドは彼自身の作品のみならず、彼の事務所で働いていた吉村順三や前川國男らの仕事をとおして日本のモダニズム建築に大きな影響を与えることに成りました。高崎の群馬音楽センターや軽井沢聖パウロ教会などでよくご存じの方も多いためです。そんな多くの日本人建築家に影響を与えたアントニン・レーモンド。午後の部では中禅寺湖畔にたたずむ、彼の住宅作品の名作の1つ《旧イタリア大使館別荘》を見学します。

奈良時代の日光開山以来、聖地とされた奥日光の中禅寺湖畔は、涼しい気候、息をのむような美しい自然、東京から北にわずか180キロメートルという地理的条件から、明治時代(1868-1912)後期には国際外交コミュニティに好まれる避暑リゾート地日本を代表する外国人避暑地となり、「夏は外務省が日光に移る」と言われるほどでした。本邸は、昭和3(1928)年、建築家アントニン・レーモンドが設計。イタリアの避暑地コモ湖を彷彿とさせる中禅寺湖の景色を最大限取り込む独特の平面プランニング、日本家屋と欧米生活様式の融合を図ったディテール、市松調模様などの内外装を杉皮貼りにしたモダンながら野趣あふれる、東洋と西洋のデザインが美しく融合したたぐいまれな建物です。歴代のイタリア大使が使用してきましたが栃木県に譲渡され復元された後、家具や食器などの調度品をほぼそのまま残す形で平成9(1997)に一般公開されました。

イタリア大使館別荘プロジェクトを引き受けたレーモンドは、ともに帝国ホテル設計にも携わっていた内山隈三、そして伝統的工法だけでなく新しい技術を取り入れることにも抵抗のなかった日光大工の名棟梁・赤坂藤吉と協働して作業を進め、オープンプランの間取りに伝統的な尺貫法を用い、赤坂藤吉は建材選びや、天然の木材の扱いにおいて驚くべき能力を発揮しました。1階は中央のリビングと暖炉のある食堂、書斎がひとつの空間につながるよう設計されており、開放的なつくりが特徴的。2階は主にベッドルームが配置されています。“材料も、技術も、地元のものを使って建てるから面白い”とレーモンドは語っていたようで、外壁・内壁は日本の伝統模様である市松模様・網代模様・矢羽根模様を日光のスギ皮・こけら板で張り、割竹で押縁をした仕上げとなっています。家具などの調度品はレーモンドの妻であるデザイナーのノエミ夫人のデザインとされ、モダンでありながら日本建築の伝統を反映したレーモンドのデザインは、用いた自然素材と絶妙に一体化して建物が周囲の環境に溶け込んでいるようです。



アントニン・レーモンド



1階 居間



1階 広縁